

聖書：ルカ 22：1～13

説教題：過越の食事の準備

日時：2012年12月9日

この22章からいよいよイエス様の受難の記事へと入って行きます。時は過越の祭りと言われる、種なしパンの祝いが近づいていた時でした。この祭りはエジプトで苦役のもとにあったイスラエルを、主なる神が導き出してくださったことを覚えるユダヤ最大の祭りです。多くの人がエルサレムに集まり、神の恵みとあわれみを思い起こして礼拝します。そんな時に、祭司長、律法学者たちがイエス様を殺すための方法を捜していました。彼らがイエス様を憎んで来たことは、これまでもずっと記されて来ました。イエス様さえいなければ、彼らは自分たちを義人として人々の間で保つことができたのに、イエス様とその御言葉によって、化けの皮を引っ剥がされてしまいました。民衆はみな、イエス様の話に聞き入っています。そんなイエスは我慢ならない。何とかして彼を除き去ろうとしてチャンス伺って来ました。イエス様がエルサレムに入った後、19章47節に「祭司長、律法学者、民のおもだった者たちは、イエスを殺そうとねらっていた。」と記されましたし、20章19節にも「律法学者、祭司長たちは、イエスが自分たちをさしてこのたとえを話されたと気づいたので、この際イエスに手をかけて捕らえようとした」とあります。しかし彼らは民衆を恐れてそれを実行できませんでした。今日の22章2節でも同じです。

そんな彼らに思ってもみない道が開けて来ます。何とイエス様の12弟子の一人、イスカリオテのユダが相談を持ちかけて来たのです。4節：「ユダは出かけて行って、祭司長たちや宮の守衛長たちと、どのようにしてイエスを彼らに引き渡そうかと相談した。」彼らは小躍りして喜びます。これでついにイエスを殺せる。これでイエスを闇に葬り去ることができる。その勝利の予感で心満たされて、彼らは喜んでユダに金をやる約束をしたのです。

それにしてもなぜユダは、この裏切り行為に出たのでしょうか。考えられる理由の一つは、お金に対する欲です。マタイ26章15～16節を見ると、ユダの方から祭司長たちに「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。」と持ちかけたことが記されています。またヨハネの福音書12章6節を見ると、彼は12弟子の会計係をしていましたが、実は盗人であって、金入れに収められていたものをいつも盗んでいた、と記されています。また考えられる別の理由として、ある人は、ユダはイエス様に失望したからだろうと言います。ユダは自分がやがての王国で大臣になることを夢見てイエス様について来たが、どうもイエス様の目的はこの世の王国を建てることではないらしい、これは私の望んだ救い主ではないと落胆して、この裏切り行為に出たという見方です。

そしてここにはもう一つの存在も登場しています。それは3節のサタンです。サタンは、この福音書の4章の荒野の誘惑の記事に出て来ました。悪魔はそこで、誘惑の手を尽くした後、しばらくの間、イエスから離れた、と書かれていました。悪魔はそれ以来、活動していなかったわけではありません。しかし時を見計らい、力を蓄えて来たサタンは、ついにこの時にユダに入って、決定的な戦いに出始めたのです。これは決してユダがサタンのあわれな犠牲者になったということではありません。ヤコブ4章7節：「神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」ユダが悪魔に捕らえられたのは、彼が神に従うことをせず、悪魔に立ち向かわなかったからです。彼はイエス様のみそばで御言葉を親しく聞いてきたのに、悪魔の誘惑に心を許して来た。貪欲に対する警告の言葉をいつも聞いて来たのに、その言葉を追いやり、金入れからいつも盗んでいた。こうした歩みを経て、ついに彼は全面的にサタンの虜になり、サタンに引きずり回される者へと落ちて行ったのです。

このユダの姿は私たちすべてにとっての警告でしょう。イエス様の12弟子の一人がこのような状態に落ちたことを思えば、誰も自分は今の位置にいるから大丈夫とは言えません。洗礼を受けて教会員であるとしても、長老や執事として奉仕しているからと言っても、あるいは牧師として今ここで説教しているからと言っても、それだけでは何の保証にもならない。私たちは自分の生活を振り返り、自分は主と主の御言葉に対してどのような関係にあるだろうかと考えて見るべきです。ユダのように、御言葉に接しながら、都合の悪い言葉は聞き流し、結局サタンのささやきに屈服する歩みを続けていないだろうか。もしそういうところがあるなら、私たちは急いで悔い改め、正しい道へと引き返して来るべきです。ボヤボヤして、誘惑に身を任せるなら、ついにはサタンの支配が私たちの内に確立されてしまいます。そして3節のような意味でサタンが入ってしまったら、もはや私たちは自分をそこから取り戻すことはできません。

さてこのように祭司長や律法学者、ユダ、そしてサタンが一致してイエス様を抹殺しようと動き始める中、イエス様はどのように行動しておられたのでしょうか。イエス様は彼らの悪巧みの餌食となってしまわれるのでしょうか。そうではないことが、この後の7～13節に記されます。そこにはイエス様がなされた過越の食事の準備が記されています。ここは不思議な感じがする箇所です。イエス様はペテロとヨハネを遣わす際に言われました。10～12節：「イエスは言われた。『町に入ると、水がめを運んでいる男に会うから、その人が入る家にまでついて行きなさい。そして、その家の主人に、「弟子たちと一しょに過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っておられる」と言いなさい。すると主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれます。そこで準備をしなさい。』」そ

う言われてふたりが出かけてみると、本当にその通りでびっくりした、という雰囲気のこと書かれています。これはイエス様は事柄がそのように進むことを予知しておられたということでしょうか。それともこれはイエス様が前もって予約し、準備しておられたことなののでしょうか。どちらであっても問題はないのですが、昔からある有力な説は、これはイエス様が前もって準備しておられたことなのだろう、という見方です。ではなぜイエス様はこんな手の込んだことをされたのでしょうか。先に答えから言うなら、それはユダにこの過越の食事の場所が知られないためです。過越の食事は家の中で行われますから、あらかじめその会場が敵に知られてしまったら、大変まずいことになります。イエス様はこの過越の食事、そして最後の晩餐ともなる席上で、弟子たちに大切なことを伝えます。次回見ますように、イエス様はそこで聖餐式を制定されます。またヨハネの福音書を見ると、この最後の晩餐の席上におけるイエス様の説教が、13章から17章までの長いスペースを割いて記されています。そして弟子たちの足を洗い、イエス様はご自身の愛を残るところなく彼らに示されます。このような大切な時が、ユダの裏切りによって妨げられてはならない。ペテロとヨハネが会場についてみると、席はずでに整っていました。これはイエス様が前もってアレンジしておられたからと見るのが自然ではないでしょうか。またその家まで導く水がめを運ぶ男について言えば、当時はサマリヤの女の記事からも分かるように、水がめを運ぶのは女性の仕事だったようです。男性は水の入った皮袋を持ち歩くことはあっても、水がめは運ばない。つまり水がめを運ぶ男性の姿は目立つものであり、すぐそれと分かる目印だったのです。イエス様はその人に、イエス様が頼んだ時間帯に、そこで働いているようにしてもらったと考えられます。遣わされたペテロとヨハネでさえ、こうしたプロセスを経てからでないと、過越の食事の会場はどこか分からないようにされていた。それほどにイエス様は慎重に、この食事会のために準備をしてくださったということです。

このようにしてルカ22章において、祭司長と律法学者、そして12弟子の裏切り者ユダが、イエス様を除き去るために共謀します。そこにさらにその陰の首謀者サタンが力をもって加わっています。闇の力が一気に動き始めます。しかし事は決して彼らの企み通りに進んだのではない、ということはこの箇所は私たちに語っています。イエス様は自ら過越の食事の準備をされました。これはイエス様をご自分から、ご自分の死の準備をされたということです。そういう意味では、イエス様を殺そうとする敵の企みと、イエス様ご自身の死の準備とがぴったり一致しています。人の殺す計画と神の救いの計画が同時進行しています。しかしこれはただの同時進行ではない。イエス様はこの状況をきちんとコントロールしておられます。ふさわしい時が来る前に、ご自身がユダによって敵の手に渡されることのないように、綿密な準備をもって対処しておられます。すなわちイエス様こそ、実はこの状況を支配している主権者であられるということです。

そしてこの後明らかにされて行くのは、真の勝利を取めるのはどっちかということです。祭司長や律法学者たちが勝ったのでしょうか。ユダがその功労者になったのでしょうか。サタンが最後に笑ったのでしょうか。いいえ。一見彼らが勝利を取めたように見える中で、最終的にはイエス様が勝たれるのです！すなわちイエス様はその十字架の死によって、私たちを救う神の御心を実現してくださいます。そしてその死によって、悪魔という死の力を持つ者を滅ぼされます。また祭司長や律法学者たちは、やがてイエス様の復活を経て、何の祝福も手にしません。ユダが最後にどんな悲惨な報いを刈り取ったかはご存知の通りです。このように敵とサタンが一致して襲いかかっても、神のご計画と力を覆すことはできないのです。人の心になるように見えても、常に神の御心こそが実現し、勝利することを今日の御言葉は私たちに示しているのではないのでしょうか。

私たちはここから大いなる慰めと力を得ることができます。私たちそれぞれの生活にも暗やみの力が色濃く覆っている時があるかもしれません。様々な人の企みがそこにあるかもしれません。また1ペテロ5章8節に「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」とあるように、サタンがほえたけるようにして私の生活を脅かしている状況があるかもしれません。しかし私たちは人の企みを恐れてはなりません。サタンの威嚇に屈してはなりません。目に見える状況に失望してはなりません。その状況における本当の主権者はイエス様だからです。イエス様は世界の歴史におけるサタンと人間の最大の反逆、最大の罪が実行されようとしていた中でも、すべてを御手に取め、彼らの企みを乗り越える仕方で、私たちの救いを勝ち取ってくださいました。イエス様は、十字架と復活を通して勝ち取った恵みの主権をもって、私たちの目に困難と思われるあらゆる状況にも共にいてくださり、そこから神の栄光に至ることと私たちにとっての最善の益とを導いてくださるお方です。このお方にこそ私たちは目を上げ、信頼して、このお方が導いてくださる最善の道を歩みたいのです。